

青森県近代文学館報

「太宰治 生誕一〇〇年特別展」開催

会期 平成二十一年七月十一日(土)～九月六日(日)

太宰治は、一九〇九(明治四十二年)六月十九日、北津軽郡金木村(現在の五所川原市)に県下屈指の大地主の六男として生まれました。「罪、生誕の時刻に在り」(『二十世紀旗手』)との意識を自らの宿命として刻印し、生の不安と苦悩にさいなまれ破滅的な生活の中から珠玉の名作を生み出した太宰は、昭和二十三年六月、三十九歳の若さで入水して果てます。しかし、その作品は「永遠の青春の書」として、今なお多くの人々に読み継がれています。

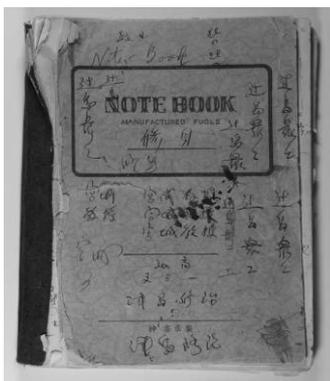
今年二〇〇九(平成二十一年)年は、太宰治の生誕百年にあたります。そのまたとない節目の年にあたり、太宰の文学、太宰を生んだ津軽の風土に改めて光を当てる特別展を開催します。

展示する資料は、昨年資料集として刊行した太宰治の旧制弘前高校時代のノート二冊(「英語」「修身」)をはじめ、原稿「お伽草紙」、句帖「亀の子」、草稿「人間失格」、太宰晩年の

手帳など、青森県近代文学館が開館以来収集してきた太宰治の貴重な直筆資料を中心に公開します。また、会期中に、太宰についての講演や朗読会も予定しています。



同ノートの中の1ページ



太宰治・旧制弘高時代ノート「修身」表紙

目次

- ・「太宰治生誕一〇〇年特別展開催」…1
- ・一篇の詩から(一戸晃)…2
- ・特別展「青森県近代詩のあゆみ」開催報告…3
- ・「青森県近代詩のあゆみ」に参加して(藤田晴史)…4
- ・企画展「農谷部春汀と『太陽』」開催報告…5
- ・企画展「寺山修司」開催報告…6
- ・企画展「葛西善蔵没後八〇年」開催報告…7
- ・企画展「青森県立図書館八〇年のあゆみ」開催報告…8
- ・第七回青森県近代文学館川柳大会開催…8
- ・パネル展開催、ギャラリートーク実施…8
- ・資料寄贈者紹介…9～11
- ・青森県近代文学館 今週のお宝、館務日誌…12

平成二十一年度企画展

□企画展「今官一 生誕一〇〇年展」

四月二十五日(土)～六月七日(日)

短篇集『壁の花』で第三十五回直木賞を受賞した今官一(一九〇九～八三、弘前市出身)の自筆資料や遺品を公開し、作家と作品の魅力に改めて迫ります。文学の師・福士幸次郎や横光利一、同い年の友・太宰治との交流も紹介します。

□十月十日(土)～十一月二十三日(月)

(二)の企画展を同時開催

「鳴海要吉没後五〇年」

ローマ字書き詩集『PUTI NI KAERI』の著者で、大正十五年に「新緑」を創刊し口語歌の普及に努めた鳴海要吉(一八八三～一九五九、現黒石市出身)の生涯と業績を振り返ります。

「菊岡久利生誕一〇〇年」

菊岡久利(一九〇九～七〇、弘前市出身)は詩人としてデビューし、戯曲を書き、小説を書きました。また書画の個展を開催するなど、生前、多岐にわたる活動を繰り広げています。そのマルチな才能を紹介する初めての展覧会です。

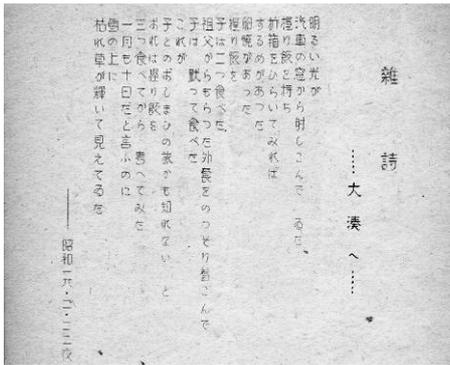
文学ビデオ新作

当館のAVブースで上映している文学ビデオに、四月から「青森県の近代文学 評論・研究」が加わります。

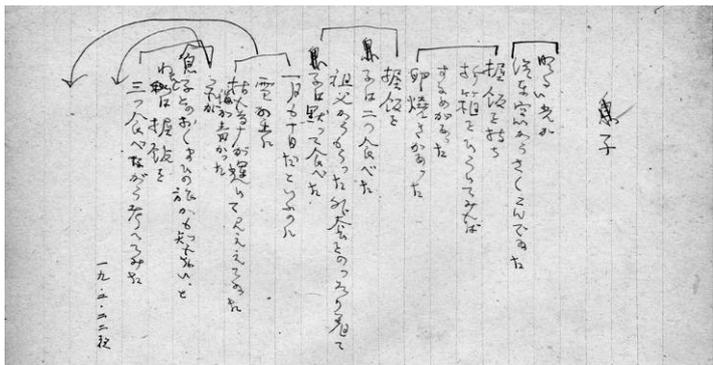
この作品は、青森県の近代文学史の中で評論・研究の分野に情熱を傾けた七人の人物をとりあげ、その業績を紹介するものです。

紹介する七人は、青森県近代文学館で常設展示している鳥谷部春汀・柳田泉・板垣直子・鳴海完造、近年まで青森県の評論・研究の分野をリードしてきた小野正文・小山内時雄、そして、現在評論家として第一線で活躍中の三浦雅士です。柳田泉の一万冊に及ぶ蔵書を収めた「柳田泉文庫」(早稲田大学図書館)、鳴海完造の四千冊を超える蔵書を集めた「鳴海文庫」(一橋大学附属図書館)、郷土の文学資料収集に生涯をかけた小山内時雄の「自游山房文庫」(弘前市)など、それぞれの人物の代表的な資料やゆかりの場所を映しながら業績を紹介します。三浦雅士の、文学・評論・研究についての熱い語りも魅力です。

一篇の詩から・一戸謙三「雑詩」：大湊へ……一戸昇



「老年」第一巻第二号(昭和21年8月5日発行)



一戸謙三「詩稿ノートV」(昭和19年2月22日)

祖父の詩稿ノートを、特別展「青森県近代詩のあゆみ」に展示させて頂いた。昭和十九年二月二十二日に詩作された「暁子」は、戦後の詩誌『老年』第二号(昭和二十一年八月)に、「雑詩」：大湊へ……のタイトルで発表された。一篇の詩から、祖父の詩作に対するモチーフを探ったり、小話を創作するのは、私にとって至福の一時である。

父と子は、黙り込んだまま、穏やかな陸奥の内海を眺めていた。

ボツ、ボツ……。列車が陸奥横浜の駅を発った頃、「サツ、昼飯ニスベ」。父は子に昼食を促した。：子は、握り飯と寿留女を黙って食べていたのだが、「あの尖った山、相野がらのお山とフトジだ。煙コ上テラ、あれ工場ダバガ：」、ボサラド、口を開くのであった。

——あれは、釜臥山、その後ろが恐山。恐山って、知ってるだろう。煙は、軍艦の黒煙なんだ。帝国海軍の軍艦が：と、微笑みながら答えようとしたのだが：父は、黙って握り飯と寿留女を食べ続けたのだった。

——これが、子との最後の昼食になるかも知れない。ガタツ、ガタツ、ガタ。大湊オ、大湊オ。終点大湊オ。昭和十九年一月十日のことである。

(筆者の創作)

※ 「父」、一戸謙三。当時四十五歳。弘前市立青年学校教員。「子」、一戸昇。謙三長男、弘前市立弘前商業高校卒。当時十九歳。「相野」、謙三の妻ムメ実家。現つがる市森田町下相野。

父と子の旅、謙三は長男の付添いとして大湊へ行ったのだった。

「一月十日(月) 雨少し晴 気温よし 昇と大湊行 四時、眠いのを我慢して起きる。

青森の恭三へ、寝ていたのを起して飯を食ふ。野

辺地から、はれて来た。十二時十五分着。鈴木君が迎えに来る。恐山入口から宿舎にトラックに行く。鈴木君と施設部を見に行った。帰りがある。御苦勞さま、といふ昇の声を後にして、山を下りて。鈴木君のところでサントリイウイスキイを飲んで、六時四十五分の汽車にて帰る。十一時青森着。恭三宅へ泊まる。(謙三の日記より)

※ 「れい」、謙三の長女、昇の妹。「林宥、川越速雄」昇の友人。「恭三」、謙三の弟。「鈴木君」、鈴木大、筆名白戸郁之介。

子の大湊行が決まってから、詩作までの三ヶ月余り。謙三の日記(■印)と昇からの軍事郵便(□印)を通じて、「父と子」の絆を探って見た。その太さを、今日の今日まで露知らず……。なお、文面は、現代仮名遣いとし、「」内は、筆者による簡単な注釈である。

昭和18年12月

■3日「商業高校に行つて、就職のことを聞いてみると、もう決定しているのだと。大湊建設部だ」とある。経理部も軍需部もあるのにならぬ。

■26日「夜、昇帰って卒業証書を出す。これでおしまいとなった。何だか飽気ない気がする。」

■28日「昇に、一人で行くと申したしたら、さびしそうにしていた。妻「ムメ」はふくれている。鈴木に問合せの手紙を書いて、焼酎を二杯だけ飲んだ。一寸酔う。」

■30日「四時ころに、佐々木「繁、佐々木菓子店」に出かけて、大湊の話の少し聞いて五時半に辞去す。」

昭和19年1月

■2日「昇と二人で床やへ行った。午後、鈴木大君来訪す。昇の事をよく頼んでやった。平川「力」氏より昇へ二十円お祝いあり。」

■5日「昇を富士「幸次郎」さんに紹介した。ようやく大湊へ出かける心構えが出来たようだ。」

■8日「昇、待てども来らず。三時まで活動「映画」見たとて、ボンヤリ帰つたので少し物を言う。夜に、昇の夜具と行李を荷造りして十二時にな

る。昇は、しよげている。貯金も取り忘れていた。」

■9日「朝、九時ころ起床して、杉沢「菟屋」の櫓を借り荷物を発送した。角八から切符を買う。五円五十銭、但し「木村」弦三さんからの餞別なり。二時過ぎに、ます川「平川経営料理店」に昇と挨拶に行く。餞別を十円いただき、「みかん」一籠お土産をいただく。夜に飯を握る。母「ふき、体調不良」は、天候変わったためらしく苦痛を言う。」

■10日「昇と大湊行」

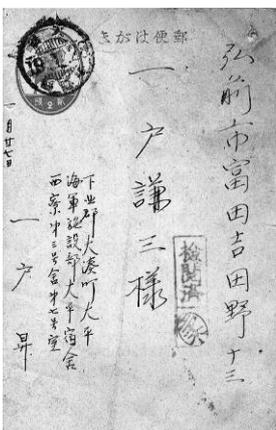
■11日「昇もこれでいよいよ世の中へ出るになる。やはり、さびしいような気がする。」

■13日「父上様には、大湊までどうも有難う御座いました。小生も元氣ですから御安心下さい。一月十一日から大平宿舎に於て訓練を受けて居ります。」

■17日「十五日出、葉書受取りました。家の事わかり大変嬉しいです。異郷地での便りを受取つた時、嬉しさ喜び例えようなし。御尋の件についての御答(四)施設部会計課第一給与係に配属先輩います。(五)外出許されていない為、鈴木様の前をトラックにて通るが、寄る事が出来な(鈴木様の宅はすくわかりました。)」

■17日「竹内長雄、逝去。午前十時。午後二時半ころに、神「良治郎」氏から電話にて竹内君の死を知る。直ちに駆けつけたが、さんねんであった。」

■24日「今日、一月からの俸給が(二十四円九十三銭)渡されました。金貳拾円也御送り致しますから、母上様の御小遣にでもい御使いださるよう、父上様から甚御面倒ですが御渡し下さる様御願ひ致します。」



昇から謙三宛「軍事郵便」(昭和19年1月28日 消印)

□ 27 日「昨夜、施設部の帰りに鈴木様の処へ御挨拶してきました。奥様が江戸弁で話すので大変だった。」

□ 27 日「自分の徴兵届の件にて大変だったことでしょう。自分は至極元氣です。東奥日報芸欄の選者になられたとのこと。また、ドイツ語を御始めになつていらっしゃる。勉強なされていらっしゃる。目に浮んできます。竹内先生が御なくなりになられたとの事。自分が市役所前で観兵式「一月八日」の行列を見たのが最後でした。技工士達は皆、南方の現場の方へ転任になるかも知れません。覚悟をきめています。」

— 昭和 19 年 2 月

□ 3 日「小田川君「未調査」は、**■**「伏字」の方へ転動になるそうです。会計課第一給与係で月末になると音が廻らぬようになりますが、今は少し閑です。」

□ 5 日「左記の本を読みたいのですが、こちらでは新刊、弘報などといったものは告がないようですから、はなはだ恐縮ですが、御願ひ致します。「関清武著音楽新論（定価 250）第一書房発売、二月新刊発売にて、新刊弘報参照」と広告が出ていました。何とぞよろしく御願ひ致します。」

□ 12 日「二月十日の日に時間を戴いて、宇曾利にある職員宿舎に引越しました。八畳間の部屋に三人居ます。引越しの帰り、品川町の八百屋北島「一夫」君と会い航空局へ参つたとのよし。海からと山からの風で吹雪になると、ちょうど相野と木造間の吹雪と同じようになります。頭巾を持って来てよかったです、つくづく考えています。」

□ 17 日「当地へ来てり一ヶ月大概こちらの生活にも慣れて来ました。もう給与支給日が近づき忙しくなつて来ました。月刊東奥方言詩選のカットなつかしいです。「葉コ散る頃」面白く感じました。」

■ 22 日「夜に、久しぶりで習作教篇書いた。」

詩稿ノートには、八篇もの詩作がなされている。「友の室」、「恵子」、「無題」、「声」、「母」、「無題」、「無題」。このうちの一篇、「恵子」が、「雑詩…：大湊へ…」として発表されたのであった。

(いちのへあきら・一戸謙三孫)

特別展「青森県近代詩のあゆみ」(平成二十年七月十二日〜九月七日) 開催報告

特別展「青森県近代詩のあゆみ」を、平成二十年七月十二日(土)から九月七日(日)まで開催しました。

明治三十年代から新体詩の創作を始め、本県近代詩の先駆者である大塚甲山をはじめとして、福士幸次郎、一戸謙三、高木恭造、菊岡久利、村次郎——と本県を代表する六人の詩人の作品と生涯を紹介するとともに、明治から大正、昭和前期、終戦までの県内詩壇のあゆみを概観したものです。

開会式では、詩誌「亜土」主宰の山田尚氏、詩誌「風塵」主宰の上條勝芳氏、青森県近代文学館評議委員で高木恭造の甥にあたる高木保氏をお迎えし、テープカットを行いました。

一〇三一枚の原稿を綴った大塚甲山の自筆稿本『蛇蛻』、村次郎の自筆詩稿「余業詩集」「海村」、県内最初の詩の結社・パストラル詩社が刊行した「パストラル詩集」や、同人の作品を福士幸次郎が指導した添削原稿など、詩集・詩誌・自筆資料等二百十本の資料を展示しました。中でも、今回の展示のためにお借りした一戸謙三の「詩稿ノート」十四冊は、詩作を始めた大正期に書かれた東西の名詩の書写や、昭和十六〜二十六年の未発表の作品が多数記されているもので、詩人の創作過程を彷彿とさせる貴重な資料として注目を集めました。来館者

からは「青森県にもこんなにたくさん立派な詩人がいることを知り、誇らしく感動した」などの感想が寄せられました。

◇特別展開連行事

文学講座(県立図書館集會室)

八月十日(日)

「高木恭造の詩について」

山田尚(詩誌「亜土」主宰)

「村次郎の詩について」

藤田晴央(「弘前詩塾」主宰)

八月二十四日(日)

「大塚甲山の詩について」

今谷弘(郷土文学研究者)

「青森県の女性詩人」

船越素子(詩誌「飾画」同人)

日曜講座(県立図書館研修室)

八月三十一日(日)

「パストラル詩社の詩人たち」

佐々木朋子(青森県近代文学館主幹)

朗読と対談の会

(県総合社会教育センター)

七月二十七日(日)

朗読「六人の詩人たち」

「大塚甲山の作品から」

高橋憲三(詩誌「飾画」同人)

「福士幸次郎の作品から」

泉谷明(詩誌「亜土」同人)

「一戸謙三の作品から」

藤田晴央(「弘前詩塾」主宰)

「高木恭造の作品から」

山田尚(詩誌「亜土」主宰)

「菊岡久利の作品から」

船越素子(詩誌「飾画」同人)

「村次郎の作品から」

上條勝芳(詩誌「風塵」主宰)

・舞踏「夏の思い出」雪雄子

・対談「青森県近代詩のあゆみ」

工藤正廣(北海道大学名誉教授)

・ロシア文学)

坂口昌明(評論家・詩人)

聞き手：船越素子(詩誌「飾画」同人)

第一部は、県内で活躍中の現代詩人による、六人の詩人の作品朗読。雪雄子氏の舞踊をはさみ、第二部は、青森県近代詩に造詣の深いお二人に対談をお願いしました。「津軽は、他のどこにもない土地、エネルギーの宝庫である、だからこそ詩のフィールドになり得る」「明治以来の青森の詩人は、体中が郷里の言葉で生きていた。言葉が身体的なものであった。自分たちの内にある身体言語を磨き上げることでは、他に抜きん出ることとはできない」——青森県の詩の系譜の中で、特に方言の問題に注目し、これからの青森県の詩はどうあるべきか、厳しくも温かい示唆に富んだ内容でした。(佐々木朋子、青森県近代文学館主幹)

「青森県近代詩のあゆみ」に参加して 藤田晴央

改めて調べでもない限り、青森県の近代詩人とは言ってもよく知らない。それが、ごく一般的などころだろう。その一般の人々のよくは知らないところを知ってほしいというところに、今回の特別展の意図があったのだと思う。かく言う僕も、今回の企画を通して初めてのごとく、青森県の近代詩の豊穡さを知ったのである。

夏真っ盛りの七月二十七日、青森県総合社会教育センターで「朗読と対談の会」が開かれた。まず、「飾画」同人の高橋憲三さんが大塚甲山の作品を朗読した。大塚甲山は明治十三年生まれ（上北町）だから、今回取り上げた詩人の中では最も「先達」だ。その正義感からくる反戦詩・抵抗詩を底のところで純粹な抒情が支えている。続いて、朗読の先駆者でもある泉谷明さんが、福士幸次郎を朗読。幸次郎は明治二十二年弘前生まれ。理想主義に裏打ちされたその詩は生命力に満ちている。地方主義をとまえ、郷里に「パストラル詩社」を誕生せしめた功績は大きい。一人（僕である）において、「亜土」主宰の山田尚さんが高木恭造の詩を朗読。高木は明治三十六年青森市生まれ。方言詩集『まるめろ』は津軽弁のもつ感情表現の豊かさを伝えた。その詩には生活と自然をみつめる強靱な気概があ

る。続いて「北奥気圏」主宰の船越素子さんが菊岡久利の作品を朗読。菊岡は明治四十二年弘前生まれ。アナキストであった菊岡が津軽や母方の郷里・秋田を素材にした詩は憂愁に満ちている。そして、「風塵」主宰の上條勝芳さんが村次郎の作品を朗読。村次郎は大正七年八戸生まれ。戦前に「四季」につながる若者たちの集まり「山の樹」に参加。その詩からは、柔らかい言葉なのに鋭い抒情がほとばしる。

そして、僕が朗読したのが一戸謙三である。一戸は明治三十二年弘前生まれ。静謐な自然描写に心情を託した抒情詩を数多く残している。若き日の僕には「古いなあ」と思う気持ち先立っていた。けれど読み直すたびに、これは、川の流れるように現代詩につながっている詩情であると思うようになった。その豊かな自然描写を通して生み出される詩情は深い。一戸の詩に流れる失意の調べこそ、今も変わらず人をして詩に向かわせしめる根源のひとつなのである。

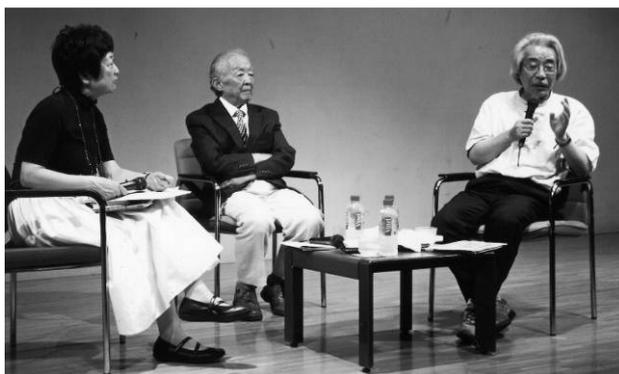
さて、朗読である。僕は人前で読む朗読は「ただ声を出して読むこと」ではなく「表現」でありたいとかねがね思っている。いつもは音楽家とコラボレーションすることで朗読を表現行為に成立させようと努めている。しかし、今回は自分一人である。そこで、音楽を流す

ことにした。何やら、一戸謙三の詩情の熱さを暗示するもの。という事で選んだものを曲名だけ順に列記すると『初恋』『誘惑』『その夜の出来事』『涙のくちづけ』となる。紙面では音楽を伝えられないが、この曲名を追うと一戸の失意の抒情が伝わりうというものではないだろうか。

この後、評論家の坂口昌明さんとロシア文学者の工藤正廣さんによる対談「青森県近代詩のあゆみ」が行われ、日をおいて八月に、いくつかのテーマによる文学講座も開かれた。山田尚さんによる「高木恭造の詩について」、今谷弘さんによる「大塚甲山の詩について」、船越素子さんによる「青森県の女性詩人」、佐々木朋子さんによる「パストラル社の詩人たち」、そして、僕も「村次郎の詩について」を語らせていただいた。村次郎は詩というものの核心のところを握って放さなかった。さらに評価されてよい詩人である。

こうした特別展に参加して思うのは、青森県というところには、いい詩人がたくさんいたのだな、その人たちの詩いた種があちこちで花を咲かせているのだけれど、どこか「人知れず咲く花」のように風にそよいでいる、ということである。近代文学館の企画を通して「人知れず咲く花」は愛でられた。ポエジーとい

うものは、古い新しいではなく、脈々と人の心に流れ続けていく。そのことを改めて教わった特別展であった。
（ふじたはるお・日本現代詩人会会員、
「弘前詩塾」主宰）



対談「青森県近代詩のあゆみ」の様子
左から船越素子氏、坂口昌明氏、工藤正廣氏



一戸謙三の詩を朗読する藤田晴央氏

企画展「没後一〇〇年―鳥谷部春汀と『太陽』」(平成二十年四月二十六、六月八日) 開催報告

企画展「没後一〇〇年―鳥谷部春汀と『太陽』」を、四月二十六日(土)から六月八日(日)までの会期で開催しました(寺山展と同時開催)。

慶応元(一八六五)年に現在の五戸町に生まれ、「報知新聞」主筆、総合雑誌「太陽」編集長などをつとめた鳥谷部春汀は、明治の中期から後期にかけて活躍したジャーナリストです。特に、明治維新の元勳をはじめとする各界著名人の月旦(げったん)は「天下の絶品」と称えられ、他の追隨を許しませんでした。また、春汀は大町桂月を誘い十和田湖を世に紹介する糸口をつくったことでも知られています。本展は、春汀が明治四十一年にこの世を去って百年という大きな節目を記念して開催したものです。

①月旦(人物評論)の第一人者、②春汀と「太陽」、③大町桂月を十和田湖に案内、④春汀の直筆資料、⑤年譜という構成で、春汀の月旦の特色を明らかにし、その生涯と業績を概観しました。展示資料は、『明治人物月旦』をはじめとする春汀の著作、「明治評論」「太陽」等の月旦発表誌、大町桂月を十和田湖に案内した年の春汀と桂月の書簡など九十九点。

春汀の直筆資料は林矩子氏(春汀の孫・千葉県在住)、掲載誌の多くは小熊健氏(弘前市在住)、春汀の写本等

は鳥谷部陽一郎氏(野辺地町在住)の出品です。会期終了後、林氏は春汀直筆の書簡、取材ノート、肖像写真等七十五点を当館に寄贈。春汀の直筆資料がなかった当館にとって、貴重な収蔵資料となりました。

資料紹介(林矩子氏寄贈資料から)

「名士訪問録」

明治二十六年十月から十一月にかけて、毎日新聞社(現在の毎日新聞とは別の新聞)社友の鳥谷部春汀(二十八歳)が、社主・島田三郎の紹介状をもらって当時の著名人を訪問し、取材したノート。訪問したのは、谷干城、大隈重信、近衛篤磨、田口卯吉ら十人。春汀は時事問題についての「名士」の見解を忠実に記録している。人物についての印象、服装、家具等についての記述もあり、春汀の人物評論の原型が見てとれる。「名士訪問録」から、緒言、谷干城、大隈重信、近衛篤磨の記述を紹介する。

緒言

島田三郎君ハ左の紹介状を余に交附して諸名士を訪問し得るの便利を興へたり、

(前略)鳥谷部銃太郎氏は毎日新聞社友にして自今何廉御高話拜聴の為め参堂仕候間御差支無之節御引見被成下度小

生より奉願候云：

余ハ此紹介状を持參して諸士を訪問し、彼等が風采容貌と議論見識と、品藻人物とハ會見を得るに隨ひ此冊子に録して他日の参照に供することとなしぬ

廿六年十月

春汀誌

二十日 谷子爵を訪ふ(欄外の記述一見して重厚真摯の風面に現はる言語懇切質實直ちに肺腑より出づ床の間に鉄砲刀剣を装置し壁上にハ楠公訣別の石盤面の顔面最目に付きて見ゆ主人の心掛のほど推し量りて奥床かし、黒々したる番茶を吞ませられたるには少し閉口なりしかど主人が質素の生活却て此中に其一端も知られていと尊し、

二十七日

早稲田に大隈伯を訪ふ、久しく其の風采を想望して今日始めて馨咳に接せり、時恰も雨後の小春、全面廣ろくしたる庭園にハ両三の園丁草を取り居れり、余ハ應接間に在りて、長閑なる庭景色を眺め、ウツトリと見惚れて居たりしか、暫らくありて伯の主人ハ杖にスガリて、物静かに入り来りてイト丁寧に一揖してサテ率とて椅子に就かしむ、余ハ忽ち伯が遭難の時を想ひ出して坐たに感愴を浮びたりき、余は云へり政治上に暗殺の弊害已まざる間ハ立憲政治の効果を擧

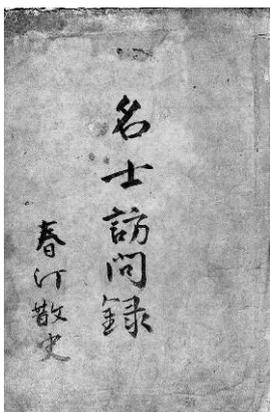
くる能はず、此弊習ハ大和魂の誤用より来り大和魂の誤用ハ教育の矯激なりし結果なりと、伯ハ云へりこれも封建時代の遺物にて早晩消滅するの時あるべしと、其れより談話種々に入り込み我問へ伯答へ心気暢発して一日の生命を加へたる心地せり、

見れば大膽宏量の大人物、思想堅確にして且該博なる風采眉目に躍然たり、斯人眞個に日本の大柱石、

二十八日 近衛公爵を訪ふ

眉目清秀言語温雅の壮年貴公子、談偶々行政整理の事に及ぶ、公ハ貴族社會中の硬派として知らるゝ丈、現政府が情実の弊を痛歎するの色見ゆ、

※「名士訪問録」については、埼玉大学名誉教授の小山博也氏が平成四年に山梨学院大学社会科学研究所研究年報「社会科学」9に翻刻・解説を掲載している。現物は、本展で初めて公開。(櫛引洋一、青森県近代文学館室長)



「名士訪問録」表紙

企画展「寺山修司―孤独な少年ジャーナリストからの出発」(平成二十年四月二十六日〜六月八日)開催報告

この企画展は、中学時代の「週間古中」新聞のガリ版編集を皮切りに、俳句誌「山彦」(のち「青い森」)や「牧羊神」、学級文芸雑誌「故郷」などの創刊、東奥日報をはじめ俳誌「暖鳥」や「寂光」への投稿、自作の「殉情歌集 咲耶姫」や「自選句集 ベにがに」の制作、全国高校俳句会議の組織など、俳句を中心とした寺山のジャーナリストとしての活動に光を当て、その孤独な作業のなかから、後年の「天井桟敷」をはじめ、多方面にわたる豊穡な「テラヤマ・ワールド」が生まれたことを、さまざまな展示資料に基づいて検証することを意図して開催しました。昭和二十九(一九五四)年「チェホフ祭」で「短歌研究」新人賞を受賞し、昭和三十一年(一九五六)年「青年俳句」で俳句と絶縁宣言をするまでの寺山の軌跡をたどった展覧会でした。

この寺山前期、それも俳句を切り口とした企画は、青森大学准教授で国際寺山修司学会の会員でもある久慈きみ代氏をゲスト・キュレーターに迎え、実現しました。久慈先生は長年にわたる寺山修司の俳句をテーマに研究を積んでこられました。この企画展はその成果とあってよいでしょう。

展覧会の中心となる資料は、「牧羊神」の同人仲間、寺山が信頼する数少ない友人であった山形健次郎氏に宛て



「牧羊神」創刊号(昭和29年2月1日発行)

た寺山の書簡類です。そこには自らの俳句観や「牧羊神」の活動についての考えなどが熱心に綴られています。「十代の俳句革命を起こす」「終生俳句をやめない」との決意が語られ、信頼する山形にも上京して一緒に活動しようとする熱心に誘う姿が見られます。しかし、やがて「先頭の孤独」を感じ、「俳句はやっぱり小さすぎる」との決別の思いを告白するに至ります。

寺山は十号(昭和三十年十月)を最後に同人を抜け、雑誌は第十二号(三十二年七月・林俊博発行)で終刊を迎えます。当時の「牧羊神」同人たちの活気ある活動の様子や、雑誌を続けていく難しさ、そして寺山の俳句への思いのかけりなど、多くが読み取れる貴重な資料でした。また今回、「天井桟敷」の海外公演を集大成した地図を作製しパネル展示しました。一九六九年、ドイツでの「毛皮のマリー」の公演を皮切りに、一九八二年、パリでの「奴婢訓」公演に至るヨーロッパ、アジア、アメリカの四十都市を

超える公演をまとめたこの地図は、寺山の国際的な活動をあらためて視覚的に把握できる貴重な資料となったと思います。

そのほか、寺山の多岐にわたる活動を理解するために、テレビ、ラジオ、映画、芝居といったジャンル別に、国内で開催あるいは上映・放映・放送されたタイトルを一覧にしてパネル展示したことも有意義であったと思います。

これらの資料は青森県近代文学館のホームページに掲載していますので、興味のある方は是非ご覧ください。

最後に、共催いただいた国際寺山修司学会の会長、清水義和、愛知学院大学教授による「寺山修司の海外公演―演劇・映画―」、また自ら俳人であり、現在、名古屋ポストン美術館の館長である学会員、馬場駿吉氏による「漂流するイメージ―寺山修司の俳句」、そして本展のキュレーターを務めた久慈きみ代氏による「寺山修司―孤独な少年ジャーナリストからの出発」が、この寺山展の日曜講座として開催されたことも特記しておきます。五月十一日の日曜日の午後、これら中身の濃い、三本の充実したレクチャーが開催され、多面的な寺山修司像がくっきりと浮かび上がりました。あらためて国際寺山修司学会には感謝の意を表します。

(黒岩恭介、青森県近代文学館館長)



馬場駿吉氏による日曜講座「漂流するイメージ―寺山修司の俳句」



企画展「寺山修司―孤独な少年ジャーナリストからの出発」ポスター

葛西善蔵没後八十年展によせて

伊藤ゆう子

没後八十年の今日までも、父の文学の存在を語り伝えて頂き、此の度の文学展は、私にとりましては、人生の終極にもなる最後の幸せな喜びではないかと、格別な思いで御座居ます。

父は昭和三年七月二十三日に四十才で亡くなりましたが、時代と共に自由な父の人生での生きざまを私小説に書き残して参りました。三才で死別した私は、父の倍の歳月を生きて、父を一人の男性として見たり、父として感じたり、私の生きて来た八十三年の人生を重ねて来まして、我家の本棚の中から、葛西善蔵全集は、父としてじつと私を見守り続けて居りました。

此の世に父の子供として生を受けて幸せだったと沁み／＼感謝して居ります。

故郷青森の方々は郷土愛深く、末長く葛西善蔵を見守り続けて下さることでせうと、私が父の元に行き着く時は必ず皆様の父への愛の深さを伝えたいと思つて居ります。

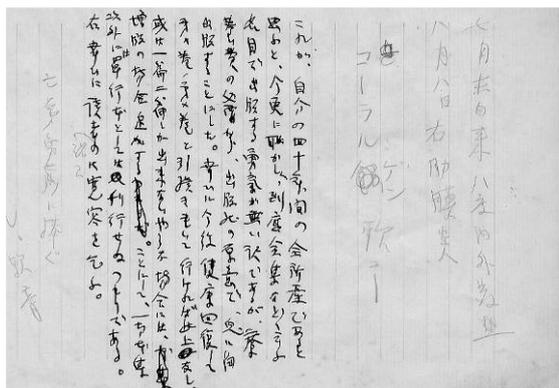
末長く皆々様の御壮健で幸多くお過ごし下さいます様念じつゝ、ペンを置きます。

(いとうゆうこ・葛西善蔵三女)

企画展「葛西善蔵 没後八〇年―或る自己小説家の軌跡―」(十月十一日～十一月二十四日)開催報告

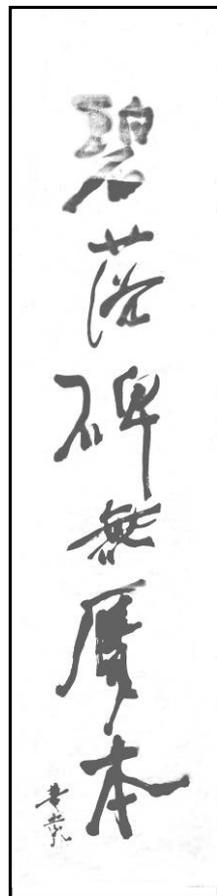
企画展「葛西善蔵 没後八〇年」を、十月十一日(土)から十一月二十四日(月)までの会期で開催しました。

上記の伊藤ゆう子氏の文章は、会期中展示室の入り口そばに掲げさせていただいたものです。展示室内では、御遺族から出品いただいた資料を中心として、書軸七点、書簡三十点、遺品七点のほか、図書など合計一一八点の資料を公開しました。この数字の中には、善蔵が遺した短歌を元に棟方志功が制作した色彩木版画「哀父頌」四冊も含まれています。関連行事として、十月九日には日曜講座「自己小説家 葛西善蔵の軌跡」、二十二日から閉会までの三日間にはギャラリートーク(いずれも竹浪主事)を開催しました。



善蔵が晩年に用いていたノートより、『葛西善蔵全集』序文の草稿部分。実際には掲載されなかった「亡弟勇蔵に捧ぐ」の一節が見える。

出品資料紹介 葛西善蔵書軸「碧落碑無贖本」(ふくやま文学館蔵)



本企画展では、ふくやま文学館の御厚意により、井伏鱒二旧蔵の資料である書軸「碧落碑無贖本」(へきらくノヒニが んぼんなシ)を展示することができた。葛西善蔵最晩年の書であり、この書を所蔵するに至った経緯について井伏鱒二は「四月十九日記」(昭和二十六年)という文章の中で次のように述べている。

この半切は葛西氏が、「明治大正文学全集」の口絵用として発行元春陽堂に与えた二枚のうちの一つである。当時、春陽堂にあつた難波君が「これは葛西さんの絶筆です。これを書いて、一週間ばかりで葛西さんは倒れました。記念に進呈します」と云つて私によこした。葛西さんは生前この「碧落碑」の文字を好んで書いてゐたやうである。(新版『井伏鱒二全集』第十四巻より)

過去に山梨県立文学館で開催された井伏鱒二展において公開されたことはあるものの、青森県内で展示されたのは今回が初めてという一品であつた。記さ

れた「碧落碑無贖本」の字句は禅語で、『五家正宗贊』という宋代の書に登場するものである。この書の中で慶舟峯という僧は、臨済宗楊岐派の祖である方會(ほうえ)の人物の素晴らしさを評して「光明盛大にして克く其の家を世ぐもの、蓋し碧落の碑、贖本無ければなり」と述べている。語意について思文閣出版『禅語辞典』は次のように解説している。

「碧落の碑に贖本無し」「碧落碑」は唐代の碑で、絳州(今の山西省新絳県)の碧落観にあつた。碑文は古篆で刻まれ、いかなる名人も模写しえない出来映えであつた。したがって世に伝わる贖本はない。素性の正しさを喩える。

つまり碧落の碑とは、大勢の人が模範にしようとするものの、誰も真似することができず、そして後世に語り継がれていく存在であると言えるだろう。創作を通して葛西善蔵が追い求めた地点を感じさせてくれる言葉である。

(竹浪直人、青森県近代文学館主事)

企画展「青森県立図書館八〇年のあゆみ」開催報告

企画展「青森県立図書館八〇年のあゆみ」を、平成二十一年一月十七日(土)から三月十五日(日)まで開催しました。県立図書館開館八十年、文学館開館十五年を記念して、文学館と図書館が共同で企画・開催したものです。

県立図書館は、昭和三年、青森市新町に開館しました。初代の建物は戦時中、空襲で焼失しますが、昭和二十八年に新生県立図書館が落成。移動図書館(ブックモバイル)によって県内読書活動の振興を図るとともに、併設ホールや展示室で多くの音楽会・美術展等を開催し、県民の文化の拠点としての役割を果たしてきました。平成六年に荒川に移転、新たに文学館が併設され、現在に至っています。

今回の展示では、県立図書館の八十年のあゆみを三つの時代に分けて、その活動を年表形式で振り返り、各時代の様子を写真や新聞記事、郷土資料や、かつて図書館で使われていた門札・検索カードなどのなつかしい資料を展示しました。また、文学館のコーナーでは、十五年のあゆみを写真と年表で紹介するとともに、過去に開催した全特別展・企画展のポスターを掲示。あわせて、これまでの特別展等で展示してきた代表的な資料三十四点を紹介しました。

(佐々木朋子、青森県近代文学館主幹)

第七回青森県近代文学館川柳大会開催

三月一日、第七回青森県近代文学館川柳大会を、青森県立図書館集会所で開催。九十六名の参加者が作品を競いあいました。また、外崎まさる氏の講演「大相撲と川柳」では、江戸時代や明治以降に作られた相撲川柳の紹介や、相撲の歴史、四股名や大銀杏、八百長の由来など、豊富な知識による楽しいお話が繰り広げられ、大好評を博しました。大会の特選句は次のとおりです。

宿題「紙」中村誠子選

尊厳死だね紙屑が熨してある

宿題「紙」前輝選

尊厳死だね紙屑が熨してある

宿題「手」三浦幸子選

手拍子がひとつになったアンコール

宿題「手」鳴海賢治選

先手七六歩後手八四自殺

宿題「変」北山まみどり選

骨拾う何も変わらぬ日常で

宿題「変」松尾喬介選

化身した私にだれも気付かない

宿題「糸」野沢行子選

羽衣をほどいて花を織ってます

宿題「糸」福土慕情選

団塊の戦士昭和の糸を吐く

千島鉄男

千島鉄男

千島鉄男

千島鉄男

千島鉄男

千島鉄男

千島鉄男

千島鉄男

千島鉄男

席題「小さい」柳田健二選

針の穴覗けば亡母の万華鏡

席題「小さい」守田啓子選

ちっぽけなちっぽけな人間だ

僕

内山孤遊

パネル展開催

企画展、特別展の内容をわかりやすく再構成し、県内各地の高等学校や大学、文化施設で開催してきたパネル展ですが、本年度で五年目を迎えることができました。会場は以下の通りです。

◇「大宰治」パネル展

県観光物産館アスパム 4月15日〜開催中

八戸高等学校 7月19日〜20日

青森南高等学校 7月19日〜20日

青森南高等学校 12月4日〜10日

◇「青森県近代俳句のあゆみ」パネル展

太宰の宿ふかうら文学館 5月1日〜18日

◇「青森県近代詩のあゆみ」パネル展

八戸高等学校 10月14日〜16日

三本木高等学校 10月16日〜20日

平内高等学校 10月18日〜19日

東奥義塾高等学校 10月20日〜22日

弘前中央高等学校 10月22日〜24日

弘前高等学校 10月27日〜29日

弘前大学附属図書館 10月29日〜31日

弘前学院大学 11月4日〜7日

青森高等学校 11月10日〜12日

青森東高等学校 11月12日〜14日

青森南高等学校 11月17日〜21日

ギャラリートーク実施

青森県近代文学館の常設展示作家十三人とその作品について、文学館解説員によるギャラリートークを実施しました。開催日とテーマは以下の通りです。

- ① 10月18日 高木恭造 方言詩集「雪女」
- ② 10月25日 三浦哲郎 「じねんじょ」
- ③ 11月15日 福土幸次郎 詩集「展望」
- ④ 11月22日 佐藤紅緑 「夾竹桃の花咲けば」
- ⑤ 12月6日 石坂洋次郎 「わが日が夢」
- ⑥ 12月13日 太宰治 「女生徒」
- ⑦ 1月17日 北島八穂 「津軽野の雪」
- ⑧ 1月24日 秋田雨雀 「一郎とにぎりめし」
- ⑨ 1月31日 葛西善蔵 「哀しき父」
- ⑩ 2月7日 今官一 「想い出す人々」
- ⑪ 2月28日 寺山修司 「あゝ、荒野」
- ⑫ 3月7日 長部日出雄 「辻音楽師の唄」
- ⑬ 3月14日 北村小松 「銀幕」



ギャラリートークの様子

資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。ありがとうございました。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

平成二十一年二月二十八日現在

図書・資料受け入れ報告

平成二十年三月～二十一年二月

- アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌの工芸―ペンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラークレクション』
- 青嶺俳句会『句集 花は葉に』二冊
- 青森観光コンベンション協会『BURARI』2009年冬号
- 青森県歌人懇話会『青森県歌集 第51集』
- 青森県環境生活部 県民生活文化課 県史編さんグループ『グラフ青森』No.356
- 青森県企画政策部政策調整課『都道府県展覧』No.602 他雑誌一冊、リーフレット二十部
- 青森県現代俳句協会『青森県現代俳句年鑑 2008年版』一冊
- 青森県詩人連盟『青森県詩集 青森二〇〇八年版』
- 青森県新幹線交流推進課『あおもり教育旅行ガイドブック2008』六冊
- 青森県川柳社『青森県川柳社 60周年 合同句集・記念誌』
- 青森県総合社会教育センター『学遊トピアあおもり2008』他五冊
- 青森県長寿社会振興センター『平成20年度 青森県高齢指導者(シニアリーダー)登録者リスト』
- 青森県文化財保護協会『東奥文化』第九集
- 青森県歩道短歌会『合同句集「北潮」』
- 青森県民文化祭文芸コンクール実行委員会『文芸コンクール入選作品集18』二冊
- 青森県立郷土館『青函連絡船なつかし

- の百年 海峡を渡る船と人』他六冊
- 青森県立三木木高等学校附属中学校『開校記念読書感想文集「ユタとふしぎな仲間たち」を読んで』二冊
- 青森県立美術館『寺山修司 劇場美術館』他一冊
- 青森市市民文化部生涯学習課 市史編さん室『新青森市史 別編3 民俗』
- あおもり草子編集部『あおもり草子』通巻一八一号 他三冊
- 秋山千恵子『詩集 桜バヴァーヌ』
- 秋吉久紀夫『現代イラン詩選輯』
- 朝日新聞出版『週刊朝日百科 週刊昭和』No.7
- 浅見キヨ子『聞き書き第2集 かまぐらの女性史 明治・大正・昭和』
- あしかげ社『蘆光第六合同句集』他三冊
- 阿部忠俊『試誘 第二集』
- 阿部次男『謎問う標識』他図書・雑誌二十三冊
- 新谷博『雪天句集 第3集』他図書・雑誌三十一冊
- 石川近代文学館『中野重治原稿資料目録』
- 市川市文学ブラザー『樋口一葉と市川の文人たち』他四冊
- 市川市役所『てな TEKON』他二冊
- 一茶記念館『小林一茶 182回忌全国俳句大会作品集』
- 伊東宣治『エーゲ海の真珠』
- いわき市立草野心平記念文学館『歷程の軌跡展』他一冊
- 岩手県立埋蔵文化財センター『岩手を掘る―いわて発掘30年―』
- 岩淵黙人『川柳句集 愉快に、皺』
- 上坂高生『碑 No.91 他図書一冊』
- NHKプロモーション企画事業部『展示会等紹介資料』(CD)
- 愛媛県立松山東高等学校同窓会『松山中学・松山東高同窓会誌 明教』第三十八号
- 大阪芸術大学『河南文藝』Vol.5
- 大阪国際児童文学館『第24回ニッサン童話と絵本のグランプリ 創作童話・絵本入賞作品』
- 大谷晃一『大谷晃一著作集 第一巻』他三冊
- 大塚正一『映画と川柳に吹く風』
- 大妻女子大学『博士學位論文 内容の要旨及び審査結果の要旨』

- 小笠原茂介『青池幻想』他雑誌十一冊
- 小笠原眞一『詩集 極楽とんぼのパレード』二冊
- 小笠原松次郎『新小説』第1巻第3号 他十七冊
- おかしよき川柳社『月刊おかしよき』第9巻第10号 他二冊
- 岡野裕行『日本近代文学研究における文学館の役割』
- 萩本清子『花霞』
- 小熊健一『明治人物小観』
- 大佛次郎記念館『鞍馬天狗読本』
- 學燈社『國文學 解釈と教材の研究』第53巻第4号
- かごしま近代文学館『向田邦子と鹿児島』葛西千香子『稽古館』Vol.4 他図書・雑誌四冊
- 「風花随筆文学賞」実行委員会事務局『第11回風花随筆文学賞入賞作品集』他一冊
- 春日出版『職業 寺山修司』他図書三冊
- 加藤憲一『句集 米寿独歩』二冊
- 加藤早苗『句集 菊贈』
- 加藤忠昌『詩集 上野の杜へ』
- 神奈川文学振興会『滑川道夫文庫目録』2 A図書』他一冊
- 河北文化事業団『第57回 平成19年度 河北文化賞』
- 鎌倉文学館『吉田秀和 音楽を言葉に』他二冊
- 鎌田慧『人権讀本』他一冊
- 鎌田紳爾『太宰治 魚服記』(CD)
- 川村健雄『雪軋ませて』他二百八冊
- 菊地敏一『記憶の海』他一冊
- 北九州市立松本清張記念館『松本清張研究 第九号』他三冊
- 木村捷則『土筆』
- 木村珠江『句集 空の罅』
- 京鹿子社『京鹿子 10000号記念誌』
- 協同『青森市総合観光ガイド Rasse』(ラッセ) 英語版』他二冊
- 京馬克己『句集 十七音のアラベスク』
- 群馬県立土屋文明記念文学館『土屋文明戦時下の思い』他四冊
- 県立神奈川近代文学館『堀田善衛展 スタジオブリが描く乱世』二冊
- 高知県立文学館『清岡卓行追悼展』他二冊
- 光文社 小説宝石編集部『小説宝石』第

- 42巻第3号
- こおりやま文学の森資料館『第八回三汀賞入選句集』他三冊
- 古河文学館『古河の歴史と文学』
- 国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター『平成19年度 博物館に関する基礎資料』
- 国立国会図書館関西館図書館協力課『地域資料に関する調査研究』
- 五所川原市教育委員会『奥田元未展』
- 小杉伴子『歌集 凍てし類』
- 小諸市教育委員会『第十四回 小諸・藤村文学賞 入選作品集』
- さいたま文学館『かな女と楸邸―書で楽しむ俳句の世界―』他二冊
- 斎藤葵和子『秋田雨雀』紀行 1905-1908』他一冊
- 榊弘子『詩集 善知鳥』他図書・雑誌・特殊資料百六点
- 坂口昌明『津軽詞華集 岩木の山ふみ』(DVD) 二枚
- 坂下和子『句集 濃くも淡くも』二冊
- 櫻庭和浩『熊本籠城』
- 佐々木高雄『小山内薫』他図書・雑誌一四二二冊
- 佐々木達司『ケルビム』第1号 他七冊
- 佐々木靖章『童謡かるた』
- 佐藤春夫記念館『新編 図録 佐藤春夫―多様・多彩な展開』
- 佐藤勇治『ふたつの故郷 津軽の空・星州の風』二冊
- J.N. ウェスタホーベン『日本近現代における「津軽文化」に関する研究及び海外への紹介』
- 塩谷勝一『わかき日』
- 渋谷江津子『文学いちば』第8号
- 十象舎『週刊 日本の100人番外編 12号』二冊
- 上越市企画・地域振興部文化振興課『小川未明の東京―童話作家宣言まで―』
- 小説家社『小説家』第二二七号
- 昭和館『昭和館 戦中・戦後のくらし』パンフレット 他十一部
- 新人物往来社『歴史讀本』第54巻第3号
- 杉本利男『遊学三昧―ある愛情物語』他一冊
- 鈴木廣一『青森県文学神探訪』他雑誌一冊

- 須藤一光「白妙」第二十五号 他三冊
- 生長の家社会事業団「古事記と日本国の世界的使命」『生命の真相』神道篇
- 世田谷文学館「フアール昆虫記の世界」展 他一冊
- 全国俳句山寺大会実行委員会「第51回全国俳句山寺大会兼題投句集」
- 仙台文学館「草野心平と仙台の詩人たち」他一冊
- 川内まこと文学館「有島三兄弟—それぞれの青春—」
- 川柳ゼミ「青い実の会」—『川柳研究資料ノート』
- 創童社「白い国の詩 通巻60号 二冊
- 大修館書店「現代文1 改訂版」
- 高木宏治「青森県管内地図」『静岡県管内地図』
- 高木大麓「新小説」第9巻9号他雑誌二十四冊
- 高木達「青森懸句集」他図書・雑誌 二十六冊
- たかなな発行所「たかなな鑑賞歳時記II」他一冊
- たき工房「Newsweek」第23巻第13号 二冊
- 竹森茂裕「麗日の会 第38回自作詩朗読の午後」(DVD) 他三枚
- 田中泰賢「Buddhism in Some American Poets」他雑誌一冊
- 田辺欣二郎「円空佛」他雑誌一冊
- 地域文化デジタル推進協議会「地域文化資産ポータル」Vol.1 他二冊
- 千島鉄男「葡萄一粒が転がっている僕の夕暮れ」
- 津軽書房「秋田雨雀 紀行—1905—1908—」二冊
- 津島園子「回想の太宰治」
- 土浦市立博物館「土浦桜物語」パンフレット 他一部
- 東奥義塾高等学校「東奥義塾研究紀要」第五集 他二冊
- 東奥日報社「TOO LIFE」第17号 他六冊
- 徳島県立文学書道館「寂聴自伝 花ひらく足あと」他三冊
- 中市郁子「野邊地方言集」
- 長嶺元久「牧水研究」第5号
- 中村道郎「歌集 虹のつと」
- 中村満隆「あしがさわふるまのこの神社」
- 成田本店「図書」『波』「青春と読書」各十二冊 計二十六冊
- 新潟県立歴史博物館「ハンコ今昔」他一冊
- 新美南吉記念館「第二十回 新美南吉童話賞入賞作品集 赤いろうそく」
- 仁科源一「青池幻想」他図書・雑誌・特許資料三十六点
- 日本近代文学館「日本近代文学館年誌 資料探索4」
- 日本現代詩歌文学館「川柳への招待」他一冊
- 日本ネパール文化交流・ナマステ会 福田美鈴「ふるこぐつちやはる」6号 他図書一冊
- 日本博物館協会「博物館の評価基準に関する調査研究」他一冊
- 野沢省悟「句集 淡交」他雑誌一冊
- 野沢省悟「北陽」27号 二冊
- Rakomado「本のバーキング」10号
- 畑中正美「夏帯」
- 林矩子「鳥谷部春汀関係資料七十五点
- 張山田鶴子「歌集 白木蓮」他四冊
- ハンナ・ジョイ・サワダ「日本語と英語で読む津軽学入門」
- 東日本高速道路 東北支社「フレンドー ド」2008 WINTER
- 姫路文学会「姫路文学」120
- 姫路文学館「姫路城主 坂井宗雅の夢」他一冊
- 平野敏「詩集 月禱」
- 平野晴子「加里」2号 他図書一冊
- 平山栄蔵「人形劇 足の神さま」幕二冊
- 吹野幸子「詩集 パラレル」
- 福井勝朗「川柳「あおの塔」会員自選合同句集」他雑誌一冊
- 福井次郎「コンプスはなぜアメリカ大陸に渡ったのか キーワードはユダヤ人問題」
- 福岡市文学館「大西巨人・走り続ける作家」
- 福士修二「創立五十周年記念誌 北潮」他一冊
- 福嶋朗「田村進 彫刻展」二冊
- 福村忠夫「素直」復刊第一號
- ふくやま文学館「井伏鱒二と木山捷平」他一冊
- 藤田晴央「孔雀船」他図書・雑誌二冊
- ふじやま出版会「改訂版 氣功治療」他一冊
- 瀧沢和子「歌集 天路ゆくとも」二冊
- 古川智映子「性転換」
- 文芸誌 風の森編集室「風の森 第1巻 第7号 他図書一冊
- 法政大学「法政」第35巻第10号 五冊
- 北星堂書店「万華鏡 対訳 寺山修司短歌集」
- 北狄社「光る道 北狄作品集 五」
- 北海道立文学館「船山滋生の彫刻と挿画」他四冊
- 堀内幸枝「堀内幸枝全詩集」
- 前橋文学館「那珂太郎—A無の詩学—」他二冊
- 町田市民文学館ことばらんど「心には北方の憂愁」他一冊
- 松山市立子規記念博物館「反骨のジャーナリスト 陸羯南・宮武外骨・黒岩涙香」
- 圓子哲雄「七行詩集 涯」
- 三浦綾子記念文学館「三浦綾子記念文学館 10年のあゆみ」
- 三上強二「極東特派員」他七冊
- 岬の分教場保存会「第六回 二十四の瞳 岬文壇エッセイ募集 受賞者作品集」
- 三鷹市芸術文化振興財団「太宰治三鷹からのメッセージ—没後60年記念展—」二冊
- 三鷹市生活環境部コミュニティ文化室「東京人」No.262
- みちのく北方漁船博物館「いのちの船—津軽海峡沿岸の漁業のあゆみ—」
- 湊川神社事務所「あゝ楠公さん」創刊新春号
- 宮沢文夫「句集 青蜥蜴」
- 椋鳩十文学記念館「第17回感想文入賞作品集」他一冊
- 武者小路実篤記念館「十四才の出生」脚本家小國英雄
- 五蘭子「韓国女流随筆選」
- 安田保民「あらかし—郵便事始—」
- 山形健次郎「鬼」No.21 他図書一冊
- 山梨県立文学館「飯田龍太展」他一冊
- 山本有三記念館「住宅物語 山本有三記念館」
- ユキヤン「聞いて楽しむ日本の名作—解説編—」
- 沃野社「富小路楨子全集」
- 与謝野晶子文学館「与謝野晶子と故郷堺」
- 吉田架子「湘南文學」第12号 他図書二冊
- 依田千穂「Terayama Shuji at la France」
- 読売書法会「北海道展記念企画展「北海道を創った人たち」」他七冊
- ライバーズ協会「Rhapsody」26号 他三冊
- レマン「大人の休日」編集部「大人の休日倶楽部ミドル」第1巻第7号 二冊
- ワタナベサービサー「北の街」第47巻第4号
- 青嶺俳句会「青嶺」
- 青森アララギ会「青森アララギ」
- 青森県環境生活部県民生活文化課 県史編さんグループ「青森県史たより」
- 青森県教育厚生会「三潮」
- 青森県郷土作家研究会「郷土作家研究」
- 青森県川柳社「川柳誌「ねぶた」」
- 青森県長寿社会振興センター「あおもり長寿セミナー」「あすなる倶楽部」
- 青森県芸文協会「芸文あおもり」
- 青森県歩道短歌会事務局「歌誌「北潮」」
- 青森古今短歌会事務局「歌誌「青森古今」」
- 青森美術音楽鑑賞会「A B O K」
- 青森文学会「青森文学」
- あしかげ社「蘆光」
- 尼崎芸術文化協会「芸文あまがさき」
- 新谷博「雪天」
- 伊藤一郎「明治大正俳句雑誌レポート」
- 井上靖記念文化財団「伝書鳩」
- 井上靖研究会「井上靖研究」
- 岩手郷土文学研究会「岩手郷土文学の研究」
- 大佛次郎記念館「おさらぎ選書」
- 鬼発行所「鬼」
- 小山正見「感泣亭秋報」
- 海光発行所「詩誌「海光」」
- 飾画の会「飾画」
- 風詩社「詩誌「風」」
- 金沢文化振興財団「研究紀要」
- 菊地寛記念館「文藝もず」
- 北の会「きたのやかた」
- 北の街社「北の街」
- 国原社「歌誌「国原」」
- 黒艦隊俳誌「黒艦隊」
- 薫風発行所「俳誌「薫風」」
- 群馬県立土屋文文明記念文学館「『風』文学紀要2008」
- 群緑短歌会「群緑」
- 勁草社「勁草」

定期刊行物(平成二十年度分)

- 月刊弘前編集室―「月刊弘前」
- 現代文学史研究所―「現代文学史研究」
- 越谷市立図書館野口富士男文庫―「野口富士男文庫」
- さいたま文学館―「文芸埼玉」
- 榊弘子―「文芸冊子」
- 湖社―「詩誌」
- 此岸俳句会―「此岸」
- シモノ―「Fishing Gate」
- 紫明の会―「紫明」
- 洪柿園俳句会―「俳誌」
- 樹水群発行所―「樹水群」
- 昭和館―「昭和のくらし研究」
- 書肆 青樹社―「誌と創造」
- 書肆 北奥舎―「北奥気圏」
- 真朱の会―「真朱」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会紀要」
- 川柳触光舎―「触光」
- 川柳ゼミ―「青い実の会」
- 川柳塔みちのく―「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらひら社―「川柳ひらひら」
- 外海吟社―「外海」
- 高田寄生木―「川柳誌」
- たかなな発行所―「俳誌」
- 「太宰治スタディーズ」の会―「太宰治スタディーズ」
- 丹青研究所―「ミュージアム・データ」
- 丹青社―「ansai.net」
- 千田和美―「川柳誌」
- 潮音社―「潮音」
- 東京都江戸東京博物館―「東京都江戸東京博物館研究報告」
- 洞乱詩社―「洞乱」
- 徳島県立文学書道館―「文芸とくしま」
- 豊巻つくし―「川柳誌」
- 十和田かばちえつぼ川柳吟社―「川柳かばちえつぼ」
- 十和田文化新聞社―「人間情報紙」
- 波詩社―「波」
- 新潟県立歴史博物館―「新潟県立歴史博物館研究紀要」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌研究」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- 梅光学院大学―「梅光文芸」
- 俳人協会―「俳句文学館紀要」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波止場の会―「波止場」
- はまなす発行所―「はまなす」
- 萬緑青森支部―「俳誌」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- ひら川吟社―「俳誌」
- 平野敏―「平野敏詩誌」
- 弘前川柳社―「川柳誌」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―「短歌誌」
- 弘前文芸協会―「文芸弘前」
- 弘前ペンクラブ事務局―「弘前ペンクラブニュース」
- 福井愛―「詩誌」
- 福井―「ム」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文化環境研究所―「Cultivate」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 文団・遙―「遙」
- 北狄社―「北狄」
- 北海道開拓の村―「北海道開拓の村研究紀要」
- 本郷七日会―「俳誌」
- 前橋文学館―「前橋文学館研究紀要」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の裾」
- 松本皎―「蓑笠亭」
- 湊川神社社務所―「湊川」
- 椋鳩十文学記念館―「紀要」
- 「群山」青森短歌会―「朔天」
- 明治大学学芸員養成課程―「紀要」
- MUSEUM STUDY
- 安田保民―「個」
- 山梨県立文学館―「紀要」
- 悠短歌会―「悠」
- 樺俳句会―「樺」
- 吉田健治―「短詩サロン」
- 若菜の会―「若菜」
- 《館報》
- 青森県総合社会教育センター―「所報響」
- 尼崎芸術文化協会―「芸文だより」
- 有島記念館―「有島記念館」
- 石川近代文学館―「石川近代文学館ニュース」
- 石坂洋次郎文学記念館―「石坂洋次郎文学記念館新聞」
- 泉鏡花記念館―「鏡花雪うさぎ」
- 一茶記念館―「一茶記念館だより」
- 井上靖記念館―「井上靖記念館報」
- いわき市立草野心平記念文学館―「いわき市立草野心平記念文学館報」
- 野心平記念館年報
- 岩手県立理蔵文化財センター―「わらびて」
- 大島博光記念館―「山査子」
- 大原富枝研究会―「山査子」
- かしま近代文学館―「メルヘン館報」
- かしま近代文学館―「メルヘン館報」
- 神奈川文学振興会―「神奈川近代文学館」
- 「神奈川近代文学館年報2007年(平成19年)度」
- 金沢文芸館―「さんざろ」
- 軽井沢高原文庫―「軽井沢高原文庫通信」
- 北九州市立松本清張記念館―「松本清張記念館報」
- 「中高生読書感想文コンクール特集号」
- 虚子記念文学館―「虚子記念文学館報」
- 高知県立文学館―「高知県立文学館ニュース」
- 「こおりやま文学の森資料館」
- 「さいたま文学館」
- 埼玉文芸家集団―「埼玉文芸家集団会報」
- 斎藤茂吉記念館―「茂吉記念館だより」
- 藤茂吉記念館年報―「平成19年度」
- 坂の上の雲ミュージアム―「坂の上のミュージアム通信」
- 佐藤春夫記念館―「佐藤春夫記念館だより」
- 昭和館―「昭和館報」
- 杉並区立郷土博物館―「杉並区立郷土博物館だより」
- 世田谷文学館―「世田谷文学館ニュース」
- 芹沢・井上文学館友の会―「芹沢・井上文学館友の会会報」
- 全国文学館協議会事務局―「全国文学館協議会会報」
- 仙台文学館―「仙台文学館ニュース」
- 台文学館年報
- 台東区立中央図書館―「波正太郎記念文庫」
- 「波正太郎記念文庫報」
- 鷹山宇一記念美術館友の会―「七戸町立鷹山宇一記念美術館友の会会報」
- 山宇一記念美術館友の会会報
- 立原道造記念館―「立原道造記念館」
- 調布市武者小路実篤記念館―「館報」
- 壺井栄文学館―「壺井栄文学館だより」
- 東京江戸東京博物館―「江戸東京博物館NEWS」
- 藤村記念館―「藤村記念館だより」
- 東北大学史料館―「東北大学史料館だより」
- 東北大学総合芸術博物館―「ニュースレター Omnividents」
- 徳島県立文学書道館―「徳島県立文学書道館ニュース」
- 十和田市立新渡戸記念館―「十和田市立新渡戸記念館だより」
- 中原中也記念館―「中原中也記念館報」
- 新潟県立歴史博物館―「総合情報誌」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌文学館報」
- 日本新聞教育文化財団―「NIEニュース」
- 俳人協会―「俳句文学館」
- 原阿佐緒記念館―「原阿佐緒記念館だより」
- 姫路文学館―「手帖」
- 弘前市立郷土文学館―「北の文脈」
- 福岡市文学館―「文学館倶楽部」
- 文化環境研究所―「文環研レポート」
- 北海道立文学館―「北海道文学館報」
- 前橋文学館―「前橋文学館報」
- 松山市立子規記念博物館―「子規博だより」
- 三浦綾子記念文学館―「三浦綾子作文賞入選作品集」
- 棟方志功記念館―「棟方志功記念館だより」
- 室蘭文学館の会―「むろらん港の文学館通信」
- 明治大学学芸員養成課程―「年報 MUSEOLOGIST」
- 盛岡てがみ館―「平成19年度盛岡てがみ館報」
- 山梨県立文学館―「山梨県立文学館報」
- 「山梨県立文学館年報」
- 吉川英治記念館―「草思堂だより」

(敬称略)

青森県近代文学館 今週のお宝

「毎日新聞」青森県版のページにおいて当館の所蔵資料の紹介記事「県近代文学館 今週のお宝」を連載中(毎週木曜日掲載)です。この連載は平成十九年の六月二十一日から始まったもので、平成二十一年一月二十九日現在、掲載回数は八十に達しています。当館ホームページ上で過去の記事内容を読むことが可能です。以下、八十回目までのタイトルの一覧を掲げます。

- 1 大室治 晩年の執筆メモ
2 「奇蹟」第2巻第4号
3 「壁の花」表紙絵の原画
4 建物竣工 俳画「野僧禁火」
5 北島八穂 草稿「耳のそのさかな」
6 寺山修司 色紙「血がつめたい鉄道ならば」
7 福土幸次郎 詩碑拓本「胸にひそむ火の叫びを雪降らさう」
8 村次郎 色紙「自画像」
9 北村小松「模型飛行機ぶた号」
10 高木恭造 色紙「まるめろ」
11 陸羯南 短冊「神ますと」
12 菊岡久利 色紙「原稿「目を閉じて」」
13 佐藤藤五郎 川柳句軸「目を閉じて」
14 佐藤藤五郎「あゝ玉杯に花うけて」初版本と連載誌
15 秋田雨雀 草稿「言詩人ワシリー・エロシエンコの話」
16 佐野ぬい「北島八穂児童文学全集表紙絵原画」
17 淡谷悠蔵 色紙「月一つ」
18 「明治評論」第1号 鳥谷部春汀「月旦」
19 高木彬光 草稿「刺青殺人事件」
20 三浦哲郎 原稿「渚の文学館」
21 石坂洋次郎「わが日わが夢」(限定版)
22 「太陽」第14巻第13号(大町桂月「奥羽一周記」掲載)
23 吉村昭 原稿「夜の雪道」
24 吉田一穂 書「掌に消える北斗の印」
25 桜庭芳露 詩稿「豫感」(福土幸次郎による添削原稿)
26 鳴海要吉 歌軸「諦めの旅ではあった」
27 蘭菊会回覧雑誌(加藤東輝、和田山蘭)
28 「日本画報」第30号「明治38年8月28日 日本新聞社刊」
29 石川啄木 歌碑拓本「船に酔ひてやさしくなれる妹の眼 見ゆ津軽の海を思へば」
30 川崎むつを 歌集『カムサツカの歌』『出帆旗』
31 鳴海完造 詩稿「大きな感謝のなかに大きな怒りを!」
32 「自待言行録」川那邊貞太郎発行兼編輯 明治32年
33 菊谷栄 原稿「最後の伝令」
34 「文芸王国」創刊号(佐々木千之編集)
35 徳富蘆花 書簡安田秀次郎宛
36 剣持和夫「北駒込」(1917年)
37 北島八穂 聖書
38 葛西善蔵「哀しき父」(舟木重雄宛献辞入り) 書軸「仰

- 山曾不遊山)
39 齊藤吉彦 調査メモ帳「上磯風聞志」
40 今外三郎 訳「農場整備論」明治20年刊行
41 大室治 書軸「聖蹟第一義」
42 青山哀因 歌碑拓本
43 増田手古奈 色紙「山の湯や夕鷺のいつまでも」
44 寺山修司 原稿「奴婢訓」
45 山口晴温 畫面「こそこのままだが」
46 中村謙三 句碑拓本
47 鳥谷部春汀 最晩年の絵葉書
48 板垣直子「漱石・鶴外・藤村」
49 天内浪史 詩碑拓本「野菊」
50 東海散士「佳人之奇遇」全16巻
51 佐藤紅緑 福井新聞社時代の書簡
52 大室治 原稿「メリイクリスマス」
53 詩誌「芝生」
54 石坂洋次郎 色紙「夜深水寒魚不食 満船空載月明掃」
55 高木恭造 旧満州からのハガキ
56 菊岡久利 短冊「師横光利一 嗚呼喪去す 光、影、樞車 ゆく久利」
57 佐藤春夫 詩軸「おちたざり」
58 柳田泉「明治初期の翻訳文学」(署名入り)
59 小山正孝 詩集「雪ぶて」
60 小国英雄 黒澤明ほか検討用映画台本「悪い奴ほどよく眠る」(昭和35年)
61 福土幸次郎 色紙「二十四歳の感傷 別離」
62 中村謙三「泰山俳句集」(岩谷山樞子編)
63 大町桂月「美文讀文 黄菊白菊」
64 棟方志功「哀父頌」酸澁の柵(嗜酸の柵)』
65 北島八穂「昭和二十一年日記」
66 改造社版「葛西善蔵全集」全五巻
67 三浦哲郎 浄書原稿「白夜を旅する人々」
68 棟方志功 装幀原画 津川武一「生けるしるし」
69 寺山修司「牧羊神」
70 「改造」第6巻第11号(葛西善蔵「湖畔手記」掲載)
71 芳賀日出男 撮影写真「ジャンプする石坂洋次郎先生」
72 「愚庵遺稿」明治37年 文求堂
73 今宮一「文学ABC」
74 佐藤紅緑「鳩の家」
75 句会記録「井泉水、桜磯子、滯留句会」
76 建物竣工「建氏画苑 海鏡図」
77 平井信作 原稿「生栞吾三郎の戦歴」
78 林征次郎 色紙「シーハイルの歌」
79 坂田二郎「パスポート」
80 ジョゼフ・ド・メストル著 陸實訳「主権原論」明治18年 博文社

館務日誌

- 4月4日 津島園子氏来館
4月17日 新谷ひろし氏来館
4月26日 企画展「鳥谷部春汀と『太陽』」寺山修司一孤独な少年ジャ・ナリストからの出発「開会」野口真里氏来館
5月7日 小熊健氏来館
5月8日 林矩子氏来館
5月10日 九條今日子氏ほか2名、森崎偏陸氏ほか2名来館
5月11日 日曜講座(馬場駿吉氏、清水義和氏、久慈きみ代氏)、山形健次郎氏、小川雅魚氏、馬場景子氏来館
5月18日 特殊資料庫燻蒸(5/22)
5月25日 日曜講座(柳引室長)
5月28日 青森中央短期大学附属第三幼稚園年長33名見学
5月30日 青森市立篠田小学校6学年5名見学
6月3日 板柳町立板柳中学校2学年10名見学
6月8日 企画展「鳥谷部春汀と『太陽』」寺山修司一孤独な少年ジャ・ナリストからの出発「開会」青森市立高田小学校2学年25名見学
6月12日 外ヶ浜町立三郎小学校3・4学年25名見学
6月13日 文学資料調査員会議、山梨県立文学館 保坂雅子氏来館
6月17日 三鷹市芸術文化振興財団 矢野勝巳氏来館
6月18日 全国文学館協議会総会(東京・柳引室長)、大室治生誕祭出席(五所川原市・竹浪主事)
6月19日 県高等学校図書委員第7分科会50名見学
7月1日 就業体験「青森中央高校4名」
7月3日 杉野利久氏来館
7月4日 津島園子氏、津島淳氏、京都市立堀川高等学校長 荒瀬克己氏来館
7月11日 鯨ヶ沢町立西海小学校37名見学
7月12日 特別展「青森県近代詩のあゆみ」開会式、山田尚、上條勝芳、高木保、齋藤三千政、米田省三、木村捷則、戸晃、各氏出席
7月16日 第10回文学散歩青森県(平川市平賀図書館主催)27名見学
7月17日 むつ市立図書館 加藤広幸氏、品木貴子氏来館
7月19日 弘前市立郷土文学館企画展記念講演会(竹浪主事)
7月23日 文学館評議委員会
7月27日 特別展記念「朗読と対談の会」
8月10日 特別展「青森県近代詩のあゆみ」文学講座①
8月11日 ②講師 山田尚氏、藤田晴央氏
8月24日 五所川原市教育長 木下あゆみ氏ほか3名来館
8月26日 特別展「青森県近代詩のあゆみ」文学講座③
8月31日 ④講師 今谷弘氏、船越素子氏、嵩温泉旅館取締役 小笠原高志氏来館
総合学習(青森高校6名)、津島信雄氏来館
井村弘子氏来館、日曜講座(佐々木主幹)

青森県近代文学館報 第二十六号
平成二十一年三月二十日発行
青森県立図書館
青森県近代文学館
発行
青森県立図書館
青森県近代文学館
http://www.plib.nec.pref.aomori.jp/top/museum/
電話 〇一七三三九一―二五七五